

しのびよる大停電

刻々と迫る電気の危機 これからどうする!

野村耕作





野村耕作 (のむらこうさく)
1927年、東京に生まれる。東京商
大卒。サンケイ新聞へ入り、経済
部記者を経て、1967年から経済担
当論説委員。エネルギー、食糧な
ど資源問題、発展途上国問題など
を専門に、財界の動きにもくわし
い。著書に「エネルギー危機の知
識」「岡崎嘉平太論」「神谷正太
郎論」などがある。

しのびよる大停電

(検印省略)

昭和54年11月21日 初版発行

定価 850円

著者	野村耕作
発行者	小室尚相
発行所	株式会社 ライフ社

東京都千代田区猿樂町2-1-8 三恵ビル
電話 東京(294)0579 振替 東京8-48806
印刷 日本製版 製本 坂本製本

☆乱丁・落丁はお取替えいたします。
0030-107915-8818



日文 701511515

284867

しのびよる 大停電

野村
耕作



A13486

ライフ社

まえがき

人間、なれというのは恐ろしいものである。

かつてベンダサンという人は、日本人が水と安全とを、空気のように自然にえられるものと考えていることに、驚きの著を書いたが、日本人の錯覚は何も水と安全にとどまらない。電気についても最近では同じような感覚を持っている。

スイッチをひねれば必ずつく。いくら使っても決して消えない。それが日本人にとっての電気なのである。

一九七三年、OPEC（石油輸出国機構）が突如として原油価格の四倍値上げと輸

出制限措置をとったとき、わたしたち日本人は初めて石油が有限であり、入手が不安定なものであることを知った。そして、さしもの高度成長を誇った日本経済も「油上の楼閣」でしかないことを悟った。

だが、当時、政府のエネルギー節約措置はもっぱら大量消費者、つまりは工場に向けられた。石油の一割供給カット、電気の供給制限、すべては大口需要家相手である。家庭生活への影響といったら、ガソリン・スタンドの日曜祝日休業ぐらいのものであった。

不幸なことには、OPECはわずか三カ月にして輸出制限を解いた。価格は上がったままだったが、カネさえ出せばいくらでも輸入できる状況に戻ってしまったのだ。こうして「油上の楼閣」感は、かんとんに薄れていく。値段の高さが節約感を持続させたものの、それは工場レベルのことに過ぎなかった。家庭生活の必需品となった灯油は政治的に価格が低く抑えられたため、台所への直接的な負担感がそれほどでもなかったためである。

その後の状況は文字通り「ノド元過ぎれば……」である。自動車の売れ行きは一向

に落ちなかったし、クーラーや冷蔵庫の売れ行きもエネルギー危機など、どこ吸く風といった感じで伸びに伸びた。

だが、狼はまたやってきた。一九七九年六月、OPECは大幅値上げを決定した。七八年末にくらべて五〇%の値上げだったが、これで原油価格は第一次石油危機以前のちょうど十倍、一バレル当たり平均二〇ドルになったのだ。

一方、時を同じくしてひらかれた東京サミット（先進国首脳会議）では、国別の輸入目標量が決められた。輸入を野放しにしておけば、国際石油市場が供給不足になって混乱に陥ることがハッキリしてきたからにはかならない。あるいはOPECの値上げに拍車をかけるだけだと判断したからである。

こうなつては政府も重い腰を上げなければならない。まず、灯油価格の人為的抑制政策をとり外し、価格が高くなることによって国民の危機意識を高める作戦に出た。

次いで家庭電器製品や自動車にたいして、燃料節約の目標を設定、省エネルギー型の商品生産に切り換えることを命じた。

もちろん、冷暖房温度の適正化、ガソリン・スタンドの日曜祝日休業などは強化し

た。だが、はたしてこの程度のことと、このエネルギー危機を乗り切れるかどうか。たしかに国民は石油をめぐる諸情勢が大変なことを知った。この夏の灯油、軽油、A重油などの不足状況は大きな教訓になった。ところが、灯油不足におののいて電気ストーブを買い込む人がふえているという。これでは真のエネルギー節約にはつながらない。

わが国に停電騒ぎがなくなってから、もう二十年以上にもなるだろうか。落雷その他の一時的事故によるごく短時間の停電、あるいは機器点検のための計画的な工事停電を除くと、停電騒ぎはほとんど起きていない。

一九七七年、ニューヨークで大停電があったときも、わが国では起こりえない停電だとの太鼓判がおされた。そのことは事実なのだが、といって、これから先も、わが国には停電は絶対にならないものなのだろうか。決してそうではないのだ。

身近かな話、「電気というのは大部分、水力で発電しているのではないか」という人がわたしの周辺にもまだまだ大勢いる。とくに婦人にそうした錯覚が多い。だから石油は節約しても、電気は節約の必要がないのではないかということになる。現

に、この二十年余、電気は途絶えたことがなく、スイッチさえひねればつくという生活になれ切っているのだから、そう思うのも不思議はないのかも知れない。

だが、事実はそうではない。いま、わが国の電気は、その六〇%が石油によってつくられている。水力は揚水式を含めても二三%に過ぎないのである。

石油危機は同時に電気の危機であるということ——いまほどの認識が国民の間に必要なときはない。その認識なしには、いつの日か、この日本列島を大停電が襲うこと、太陽が東から昇り、秋のあとに冬が来ることと同じくらいに確実である。

一九七九年秋

野村耕作

目次

まえがき

第一章 日本列島大停電……………	13
------------------	----

ある日、突然に	14
---------	----

フランスの大停電	22
----------	----

ニューヨークの大停電	28
------------	----

停電のない社会を築くために	33
---------------	----

電力会社の仕組みとわたしたち	38
----------------	----

欧米諸国は国営も民営も	46
-------------	----

第二章 豊富・低廉時代の終わり……………55

神話化した豊富・低廉時代 56

長期計画に立ちはだかる諸障害 61

本格化する石油危機 69

ウナギのぼりの燃料コスト 75

為替レートや資本費も 79

資金調達にも厚いカベ 82

深刻きわめる立地難 86

立地難は送配電線にも 91

地域ごとに違う諸課題——電力九社の現況と将来—— 95

「地方の時代」を越えて 104

第三章 大停電を避けるための戦略……………111

必要な多角的戦略 112

I 節約戦略 114

なぜ、節約が必要か 114

アメリカの決意に学べ 119

熱意に欠ける日本 123

節約型の電気器具を 129

電気は輸入できない——産業構造も省エネルギー型に——

価格機能か、割当てか——節約の手段をめぐって——

132

II 開発戦略 143

石 炭 144

水力発電 158

原子力 163

地熱発電 170

LNG(液化天然ガス) 172

III 資源外交戦略 175

電源開発協力——新しい挑戦—— 175

対産油国外交——中東は決して遠くない—— 181

本書の中の特殊な用語（＊） 186

おわりに——ロマンの復活を—— 188

第一章 日本列島大停電

ある日、突然に

一九八五年八月X日、午後二時十六分、突如として首都圏を停電が襲った。

最初に停電が起きたのは、東京都北部の京北変電所管内。だが、停電地域は、またたく間に首都圏の大部分にひろがり、八分後には東京電力管内すべての地域にひろがっていた。

大阪が停電に陥ったのは、それからわずかに三十秒後。これも最初は大阪、神戸地区だったが、五分後には関西電力管内全地域にわたる停電となった。

この日はちょうど全国高校野球の決勝戦の日。勝ち残った二校が覇を争っていた。片や一回戦以来、すべて完封勝ちを続け、毎試合十五個以上の奪三振を記録してきた平井投手を擁する東京都立・東高校、一方はこれまた毎試合本塁打、二試合連続サイクル・ヒット、通算打率〇・七五〇という、史上空前の強打者中林左翼手を中心とす

る大阪府立・西高校。

この試合を見ないでは野球を語れない、とばかり、甲子園はもちろん超満員。各家庭でも、そして各オフィス、工場でも、テレビと名のつくテレビは、すべてスイッチ・オン。このときばかりは、社長も平社員も等しく観客になり切っていた。

ちょうどこの日は、九日続きの熱帯夜のあと、日本列島全体が朝から大変な暑さだった。午前十時には東京の寒暖計が三十三度を記録、大阪では九時に三十四度になっていた。そして試合が開始された午後一時には、何と、東京で三十八度、大阪では三十七度と、いずれも気象庁はじまっていたらしいの高温を記録していた。しかもこの異常気温は東京、大阪だけにとどまらなかった。北海道を除く日本列島全域の都市で三十度を越え、とくに宇都宮では四十一度、日本記録を更新していたのだ。

この異常高温のため冷房器はすべてスイッチ・オン。外気の熱が高いために、各家庭、商店の目盛りは「最強」に合わされ、ビルやオフィスでも「最強」にしなければならなかった。例年、夏のピーク時には、気温が一度あがるとに冷房需要のための電気使用量が三〇〇万キロワットふえるという。それから概算すると、この日の冷房需